

かのや未来創造プログラム

平和の花束

2022

多くの若者が特別攻撃隊として
飛び立っていったこの鹿屋の地から
平和へのメッセージを世界に

平和の花束実行委員会

平和の花束 2022

目次

○あいさつ	2
鹿屋市教育委員会 教育長 中野 健作	
○平和の花束2022開催内容	3
○平和へのメッセージ優秀作品	6
・最優秀賞・優秀賞・特別賞受賞者一覧	
・小学校五・六年生の部	7
・中学生の部	11
・高校生の部	15
・英語部門	19
○応募作品数・応募校	25
○講評	
・日本語部門審査委員長 上谷 順三郎	26
・英語部門審査委員長 吉重 美紀	27
○「平和へのメッセージ」朗読録音	28
○「平和について考える」	30
私たちのまち鹿屋に残る戦跡	
鹿屋市の戦跡MAP	38
○空がつなぐ まち・ひとづくり推進協議会	40





平和な未来を創るために

鹿屋市教育委員会 教育長 中野 健 作

太平洋戦争末期に、日本で最も多くの若者が特攻隊員として飛び立ったこの鹿屋の地から、平和へのメッセージを発信する「かのや未来創造プログラム 平和の花束」は、今年で九年目を迎えました。戦後七十七年目となった今年の夏、「平和の花束2022」では、出席者数の制限はあったものの、三年ぶりに式典を開催することができました。オープニングアクトとして鹿屋女子高等学校書道部によるパフォーマンス、第一部では各部門最優秀作品・優秀作品の授賞式及び最優秀作品の朗読を行いました。また、第二部では東川隆太郎氏による、鹿屋に残る戦跡と近代日本史の中での本県の役割について、徹底したフィールドワークに基づく貴重な講演を拝聴しました。コロナ禍にあってもこのような式典を開催することができ、「当たり前前の日常」が少しずつ戻っていることを感じ、そのありがたさに改めて感謝した次第です。

平和へのメッセージは、今年度、海を越えて台湾からも寄せられ、会場では、その優秀作品が放映されるなど、総数四、一四八点の応募がありました。特に今回は、昨今の世界情勢に関する様々な報道を、若々しく豊かな感性で見つめた作品が多く見られました。また、戦争遺跡を訪れたり身近な人の戦争体験に触れたりしたことをもとに、平和や命の尊さについて考えたり、現代社会の抱える問題を改めて問いかけたりするものもありました。どの作品からも、平和な未来を創るために何ができるかを、これからの時代を担っていく児童生徒一人一人が主体として思索を深めたことが手に取るように伝わり、大変頼もしく感じました。

私たちはこれからも、戦争の遺跡や体験、それらに基づく平和への思いを若い世代に繋いでいくと共に、平和へのメッセージをここ鹿屋の地から日本全国、そして世界へ発信し続けてまいります。

最後に、「平和の花束」の開催にあたって、「平和へのメッセージ」コンテストの審査や記念誌の発刊、及びMBCラジオでの朗読放送に御支援、御協力をいただきました多くの企業をはじめ、すべての皆様に厚く御礼を申し上げます。





○主催者あいさつ
鹿屋市教育委員会 教育長
中野 健作



主催者あいさつ



書道パフォーマンス

オープニング

○鹿屋市立鹿屋女子高等学校書道部

書道パフォーマンス

「希望」

かのや未来創造プログラム

日時：令和4年8月30日（火）

平和の花束2022

会場：リナシティかのや3階ホール

第1部 平和へのメッセージ

■「平和へのメッセージ」

授賞式・朗読・講評

○授賞式

- ・最優秀賞
- ・優秀賞
- ・特別賞
- 「空がつながまち・ひとつくり推進協議会賞」

○「平和へのメッセージ」朗読【最優秀賞受賞者】

日本語部門

・小学校五・六年生の部 最優秀賞

鹿屋市立西俣小学校5年 有嶋 航 さん

「平和の山へ」

・中学生の部 最優秀賞

鹿屋市立串良中学校3年 石之脇 泰牙 さん

「平和の一步先へ」



授賞式

・ 高校生の部 最優秀賞

鹿屋市立鹿屋女子高等学校3年 上村 彩花 さん
「写真から伝わる覚悟と平和」



「平和へのメッセージ」朗読

英語部門

・ 最優秀賞

始良市立山田中学校3年 阿蘇 ひなた さん
「To the World My Great Grandmother Hoped」

○ 講評

審査委員長

上谷 順二郎 先生

(鹿児島大学教育学部教授)



講評

※台湾からの優秀作品のビデオ放映

第2部 平和を考える

講演

演題 「鹿児島県内の戦跡から鹿屋基地を見つめる」
講師：NPO法人まちづくり地域フォーラム・かご
しま探検の会 東川 隆太郎 氏

鹿児島県は本土最南端に位置するという地理的環境、柔らかな加工が容易なシラス質の土壌であるという地学的環境、薩英戦争や西南戦争を経験し明治維新の礎を築いたという文化的環境などから、多種多様な戦跡が残されていると述べられました。

前半では戊辰戦争をはじめ西南戦争から日本陸海軍の創設、日露戦争を経て太平洋戦争に至る経過をたどりながら、その時々鹿児島県及び県出身者が果たした役割について話されました。

後半では太平洋戦争中の鹿屋基地の役割に触れながら、第六垂水丸の悲劇、輝北町へのB29墜落、高須海岸への米軍上陸について紹介し、市民の日常生活を圧迫する戦争悲劇について語られました。

終盤では戦後の暮らしや復興について見つめることの重要性に触れられました。現代においては異質なものとなった戦跡が静かに私たちへ語りかけるものを見つめることが、今後の平和を作っていくうえで大切な意味があるとの思いを語って締めくくられました。





平和へのメッセージ

優秀作品

■ 「最優秀賞」及び「優秀賞」受賞者（日本語部門）

賞	学校名	学年	氏名（敬称略）	題	
小学校五・六年生の部	最優秀賞	鹿屋市立西俣小学校	5年	有嶋 航	平和の山へ
	優秀賞	鹿児島市立前之浜小学校	6年	増永 海夢	僕たちにできること
	優秀賞	鹿児島市立田上小学校	6年	郡山 結羽	平和の輪を広げたい
	優秀賞	鹿屋市立下名小学校	6年	田畑 いろは	間違いを違いに
中学生の部	最優秀賞	鹿屋市立鹿串良中学校	3年	石之脇 泰牙	平和の一步先へ
	優秀賞	鹿児島市立緑丘中学校	2年	内ノ倉 千帆	「平和」について感じる私の違和感
	優秀賞	鹿屋市立第一鹿屋中学校	1年	木下 湖雪	私の祖父は芋を食べない
	優秀賞	鹿屋市立吾平中学校	3年	本城 恵子	世界中の人々の心に平和を
高校生の部	最優秀賞	鹿屋市立鹿屋女子高等学校	3年	上村 彩花	写真から伝わる覚悟と平和
	優秀賞	兵庫県立北条高等学校	2年	衣川 心音	つなぐ
	優秀賞	鹿屋市立鹿屋女子高等学校	3年	尾崎 妃夏	変えなければいけない未来
	優秀賞	兵庫県立北条高等学校	2年	岡本 琉奈	「今」できることを

■ 「最優秀賞」及び「優秀賞」受賞者（英語部門）

賞	学校名	学年	氏名	題
最優秀賞	始良市立山田中学校	3年	阿蘇 ひなた	To the World My Great Grandmother Hoped
優秀賞	福岡県筑陽学園高等学校	2年	春山 夏菜絵	Destination of Peace
優秀賞	National Taipei University of Education Experimental Elementary School 国立台北教育大学附属小学校	6年	Peng Suan Qiu (Madeline)	Peace is the way

■ 特別賞「空がつなぐまち・ひとづくり推進協議会賞」受賞者

学校名	学年	氏名	題
熊本県 錦町立一武小学校	6年	黒木 理帆	「日常」という幸せを未来へバトンパス
兵庫県 加西市立善防中学校	3年	後藤 凜子	蒼空の向こう側
兵庫県立北条高等学校	2年	吉田 咲良	未来が平和であるために

小学校五・六年生の部

最優秀賞

平和の山へ

鹿屋市立西俣小学校 五年 有 嶋 航

僕の家族はよく山に登る。高隈連山の大的柄岳や御岳、中岳、稲尾岳など、この一年で十二回登っている。どの山も空気がきれいで、途中吹く風もとても気持ちがよく、リラックスできる。ただ何より、頂上にたどり着いた時の達成感を味わうのは最高だ。そして、ゴールに見える滝や、山頂から見える町や海の景色。この風景が僕にとっては最高のプレゼントだ。中には、登るのがきつい山もある。そんな時はお互い「がんばれ。」と声を掛け合う。だからがんばれる。不思議ときつさも無くなる。だから家族と一緒に山登りは、僕にとって平和そのものだ。これからもっと高い山や景色のいい山など、家族みんなでチャレンジしたい。

そんな時、戦争が起きる前のウクライナの山や町の写真を見た。日本の山と比べて高く、青々とした山々が一面に広がり、輝く雪が積もつているところもあった。草しかない山頂から見る景色もきつと素晴らしいだろうと思う。一目ぼれしてしまうほどだ。街を見ると、おとぎ話に出てくるようなお城みたいな建物があったり、人々が楽しそうにベンチでおしゃべりしていたり、家族で海水浴を楽しんでいたりと、あたり前の日常がそこにあった。

ところが、今は、きれいだった街のたくさんさんの建物が壊され、自然も破壊され、人もたくさん亡くなっている。教会の地下で悲しそうな顔をした子どもたちが、ぎゅうぎゅう詰めになっている写真に目が留まった。衝撃を受けた。大人の姿はほとんどない。怖いだらう、苦しいだらう、おなかもすいているだらう、家族はどこにいいのか不安だらう。いろいろな気持ちがわき上がってきた。きっとこの子どもたちもロシア軍の侵攻がなければ、僕たちと同じように楽しい生活を送っていたらと思うと、とても心が痛くなる。

僕に何かできることはないか考えてみた。家族でもよくそんな話題になる。戦争をやめさせることができると一番良いが、自分たちにできること。そこで僕は、市役所の支所で「戦争が終わりますように」と願いながら寄付をした。もっとできることはないか家族で話し合っている。

僕は来週も家族で山に登る。楽しみでしかたがない。大隅半島の山々を制したら、鹿児島県の山々。そして、いつかは、家族で平和になったウクライナの山にチャレンジしたい。

優秀賞

僕たちにできること

鹿児島市立前之浜小学校 六年 増 永 海 夢

「特攻隊を知っていますか。」

担任の先生が、僕たちに問いかけ、特別攻撃隊のことを、くわしく話をしてくださいました。僕は、特別攻撃隊が、日本に存在していたことを初めて知りました。昔、日本が戦争をしていた事実は知っています。でも、正直、戦争が怖くて、戦争について自ら知ろうとしてきませんでした。特別攻撃隊の話も、少し怖いなと思いました。僕たちと年齢があまり変わらない若者が、特別攻撃隊として戦っていたことを知り、調べてみたくなりました。

日本のために、勝つために、自分の命をかけて体当たり。僕には、絶対にできないと思いました。自分が死ぬのが分かっていながら突撃するなんて、相当の覚悟がないとできません。

また、インターネットで調べてみると、志願と命令の二つが書かれています。特攻隊の人たちが、家族に残した手紙も読んでみました。もっと生きたかったのだろうという気持ちと、志願ではなかったのではないかという気持ちがありました。でもそれは、特別攻撃隊となって戦った本人たちにしか分かりません。戦争をせずに、話し合いで解決できていれば、こんなにも辛い日本の歴史として、きざまれることはなかったのかもしれません。戦争がなければ、その時代が平和で幸せだと感じていたと思います。僕は今の時代に生まれて良かったです。

でもそれは、この平和な日本を作るために、たくさんの人たちが頑張ってきたからです。この平和な世の中を大切に、日本のために命をかけて戦ってきた人たちも、きつと願っているような気がします。

今よく耳にするSDGsという言葉があります。十六番目の目標に、「平和と公正をすべての人に」と記されています。平和のために、自分たちができることは何かを考えた時に、一つの考えが浮かびました。それは、とても簡単なことでした。まず、今世界で起きていることやどのような生活をしているか等、世界の問題に対して興味をもつことが大事なのだと考えました。また、僕も参加したことのある募金活動や署名活動も、平和のためにできる大切なことだと思っています。

戦争のことだけを見ると、マイナスなことばかりが頭に残りますが、その戦争があったから、今の平和な日本があり、戦争を防ぐために世界中でいろいろな対応がなされています。平和を守っていくために自分ができること、まだ争いのある国々が平和になるためにできること、全てを良くするために世界が一つになっていくことを考えると、明るく前向きな気持ちになれる気がします。昔の人たちが築いてきた平和な世界を、今度は僕たちが次につないでいきたいです。

優秀賞

平和の輪を広げたい

鹿児島市立田上小学校 六年 郡 山 結 羽

「本日、午前十一時半ごろ、安倍元首相がじゅうげきされました。」

私ที่บ้านに帰ると、信じられないニュースが飛びこんできました。どのチャンネルに変えてもそのニュースで持ちきりでした。ふだんあまりニュースをじっくりと見ることのない私ですが、このしゅげきてきな事件からは、目をそむけることができませんでした。

この事件の容疑者は、元海上自衛隊の人で手製のけんじゅうを用いての犯行であったことが報じられていました。まさか日本でこんなことが起きると思ってもいなくて、こわくて悲しい気持ちになりました。もう二度とこのような悲げきを生まないために、私たちには何ができるのでしょうか。

六年生になり、社会科で最初に学習したのは、「日本国憲法」についてでした。安倍元首相は、この日本国憲法の第九条を改正しようとしていたらしいです。この第九条では、「争いごとを武力で解決しないこと、そのために戦力をもたないこと」などが示されていることを学びました。ここからも、今回の事件のように、けんじゅうを使って人の命をうばうことは、絶対にあってはならないことだといえます。戦争ではないのですが、武器を使って攻撃するという発想自体が、戦争につながる行為だと私は思います。

現在の日本は、戦争が起きていなくても平和だといえませんが。命をうばう事件がなくなるには、まずけんじゅうなどの武器を「もたない・つぐらない・もちこませない」ことが大切だと思います。これは、非核三原則をもとに考えたものです。日本では、けんじゅうをもつことは許されていませんが、世の中には、外国からこつそりと入手したり、自分で作ったりしているという現実があります。私は、このスローガンをかかげ、大人も子どももみんなが日本から武器をなくしていこうと行動していくことで、本当の平和がおとずれると考えます。

今、私にできることは、まず勉強することです。世界でどのような問題が起きているのか、その原因やきっかけは何なのかなど、平和のさまたげになるものについて広く知ることや深く考えることが必要です。そうすることで、よりよい解決方法を探ることができると思うからです。

もう一つは、人にやさしくすることです。人にやさしくするには、自分の心にゆとりがないといけないと聞いたことがあります。私が人に親切にすることで、その人の心にはゆとりが生まれるはずで、そして、その人がゆとりをもてれば、他の誰かにもやさしくできるのではないのでしょうか。

「平和」には、多くの人々の協力が必要です。私も平和の輪を広げる人たちの一員として、自分にできることを考えて行動していきたいです。

間違いを違いに

鹿屋市立下名小学校 六年 田 畑 いろは

間違いという言葉は、「間」と「違い」という漢字が合わさった言葉です。このことを私は「国と国で違いがあるのは当然のことなのに、それを受け入れず、間が空いてしまうから、争いが起こってしまう」と考えています。

今、毎日のようにニュースになっている、ロシアとウクライナの戦争も、これまでの戦争も、国と国に「間」が生まれ、戦争が起こっているのではないでしょうか。そこで、ウクライナとロシアが戦争を始めた原因を調べてみることにしました。

ロシアとウクライナが戦争を始めた原因は二つありました。一つ目はロシアと仲が悪いアメリカやヨーロッパの国々で作っているNATOにウクライナが入るのを邪魔するためです。そして二つ目は、ロシア政権が「ロシア人とウクライナ人は一体である」という考えをもとに、ウクライナもしたがえようとしたからです。でも、なぜ戦争で解決しようと思ったのでしょうか。ロシアは毎年冬になると暖房に必要な天然ガスをやらないぞとウクライナに圧力をかけていました。しかし、ウクライナが天然ガスをロシア以外の国から手に入れられるようになり、脅しの効果がなくなったのです。そして、軍事力が使われませんでした。日本を含む多くの国々は軍事力を使って無理やり言うことを聞かせようとすることは国際的ルールを破っていると行ってロシアを責めています。こうなると、大きな戦争に

なってしまうかもしれません。そして平和どころか、また、多くの犠牲が生じるかもしれません。

そうならないために、私たち子供にできることはないでしょうか。私は違いを認め合い寄りそう心をもつことだと考えています。性格、容姿、考え方、みんな違って当然です。違うからこそ、私も姉妹や友達ともけんかをします。それはきつと自分と友達や姉妹の考えの違いをうまく埋めることができなくて、けんかになってしまうのです。腹が立つても少し立ち止まって、相手の気持ちに寄りそうことができれば、おたがいの「間」を埋めていけて、相手の意見を尊重できるのではないかと思います。

金子みすゞさんの「私と小鳥と鈴と」にあるようにこの世にあるものは誰一人、何一つ、同じものではなく、だからこそみんな素晴らしい。丸ごと認めて傷つけない。一番大事なのはそこなのではないでしょうか。

「間違い」を「違い」に変え、国同士の違いを認め合えるよきな世界になるといいです。

中学生の部

最優秀賞

平和の一步先へ

鹿屋市立串良中学校 三年 石之脇 泰 牙

あなたが平和についてできることには何があるだろうか。今、世界ではロシアとウクライナの情勢が話題となっている。人間は「今起きている事」によく目を向けるが、この「戦争」という事に対しては、今と昔をリンクさせることが大切だと僕は思う。「歴史はくり返される。」という言葉があるが、本当にくり返されているのだろうか。今起きている問題は歴史上、氷山の一角にすぎないのだろうか。僕は平和についてできることを探るため、まずは昔の戦争にフォーカスを当てることにした。

今年を終戦から七十七年を迎える年だ。早いと感じるか遅いと感じるかは、戦時中を生きた人々、今を生きる僕たち、それぞれの個人に委ねられる。しかし平和を望むという点では昔も今も共通していることではないだろうか。僕が住む串良の地は深く戦争に関わりがある。平和学習でも様々な場所を訪れた。鹿屋航空基地史料館には特攻で飛び立った隊員の顔写真が壁一面に貼られている。もちろん串良から飛び立った隊員の写真もだ。特攻服に身を包み、力強い敬礼のポーズ。穏やかな表情やどこか寂しそうな眼差し。写真と目を合わせると、ナイフのような鋭い何かの心に突き刺さる感覚は今でもはつきりと覚

えている。けれど、僕の心以上に戦争は多くの傷を残していた。小さな子どもの死、大切な人との別れ、家族の他界などストレスや悲惨といった言葉では片付けられない程のとても大きな傷。僕は素直に受け入れることはできず疑わしく思った。

しかし今、ロシアとウクライナの問題により以前よりも現実味が増した。ネット社会の今、最初はデマ情報ではないかとすら思った。ところがネットは日に日に現実を突きつけてきた。ミサイルの発射映像や、同世代の子の死など、平和学習で目にした哀しい景色よりも、もっと鮮明に。終戦とは国内の事にすぎなかったということをひどく痛感した。僕はこの時、初めてネットから情報を得ることをためらった。

大きな傷が時間をかけて塞がり、痣となって残り続ける。平和というレッテルが貼られた日本。世界では今も戦争に苦しむ人々がいる。その中で本当に平和と言えるのだろうか。世界平和と日本の平和がイコールで結ばれるまで、「本当の平和」について疑い、考え続けようと思う。昔と今をリンクさせ、僕にできることは、「平和についての自分の思いの発信」だと感じた。ネットからの発信、言葉で後世に語り継ぐ、方法は何でもいい。発信することに意味があると思う。大きな痣が風化してなくならないように。世界中の人々が救いを求める手を伸ばすのではなく、青い空に、「ピース」の手を掲げられるように。

「平和」について感じる私の違和感

鹿児島市立緑丘中学校 二年 内ノ倉 千帆

「平和」という言葉は、よく聞く。「平和な社会」、「平和のため」などと。それが大事だということも分かっている。中学生となり平和学習で戦争に関する場所、知覧と長崎へ行った。私は、そこへ行き、「平和」について感じる、うまく表現し切れない違和感を覚えた。改めてその意味を考えてみた。

知覧は、平和を夢見て攻撃をしに行った場所だった。特別攻撃、戦闘機で敵の船へ体当たりする攻撃だった。そこには、家族や恋人宛ての力強い文字で書かれた遺書やスタボロになった戦闘機などが美しく展示されているように見えた。私は、それを見て特攻言う悲惨で残酷な行為でありながらも、個人の思いとは別に美談になっているかのように違和感を覚えた。

長崎は、平和が一瞬で破壊された場所だった。遺跡などはたくさんあったが、町はきれいに整備され、原子爆弾により大勢の人々が亡くなったとは思えない、昔の戦争の傷跡を見せない場所だと思った。ここでも私は、疑問が次々に浮かんだ。なぜ、軍事基地を狙わなかったのだろうか。もし、そうであったらたくさんの人々がこの出来事に関心をもつだろうか。その時、軍事基地なら攻撃してもよいという、日常的感觉とは異なる、戦争行為を肯定する心理をもつことに違和感を覚えた。

私は、戦争について真剣に考えていたつもりだったが、実はどこかで過去のことだと思っっている自分がいた。「人の命は最

も大切」という考えが当たり前のこの時代にだって、戦争はある。

それを痛感させられたのは、ウクライナとロシアの戦争だ。現在も続いており、この瞬間に命を奪われた人もいるかもしれない。世の中では、ロシアがウクライナを侵攻した、悪者だとなっている。私も、もちろん武力を使って人の大切なものを奪う、戦争は絶対にしてはいけないと強く思う。だが、ニュースを見ているとロシア軍がウクライナ軍を殺すと非難され、ウクライナ軍がロシア軍を殺すと称賛される。人は誰であっても殺してはいけないのになぜだろうと違和感を感じてしまう。戦争の影響を受けてない私だからだろう。

これらのことを通じて、人は何を平和だと感じるのだろうか。改めて考えた。辞書では、「平和」とは、「戦争がないこと」、「世の中が穏やかな様子」とされている。戦争が始まっていない状態が「平和」、それとも戦争をした後に訪れるのが「平和」なのか。平和の対義語は必ずしも戦争とは言えないが、結局、「戦争」という言葉を使わないと「平和」を今の私では説明することができない。まさにこれが私を感じていた違和感だ。それを解消するために、平和と戦争をもつと多面的に学びたい。そして、「平和」について「戦争のない状態」という以上に、よりよく説明できる人になりたい、そう強く思った。

優秀賞

私の祖父は芋を食べない

鹿屋市立第一鹿屋中学校 一年 木下 湖雪

私の祖父は、薩摩川内市で生まれ、現在は鹿児島市に住んでいます。たまに遊びに行った時は大喜びで食事に連れていってくれる、優しい人です。

昭和二十年、ポツダム宣言の数ヶ月前に川内でも空襲しゅうががありました。祖父は当時、五才でした。祖父の父は戦争にかり出され、母と一才の妹と一緒に毎日空しゅう警報の音におびえながら過ごしていたそうです。毎日お腹がすいていて、たえられなくなったら畑にうまっている芋をほり出して、生のままかじり、しのいでいました。何故、生のままかというと、火を使うとけむりや灯りが発生し敵に居場所が知られて危険なため、そのまま食べるしかなかったそうです。

ある日、芋をほっていると、

「ビシッ。ビシッ。」

と音がして見上げると、戦とう機が飛んでいて、

「殺される……。」

と思いつながら土に頭をつけてうずくまったそうです。たまたま当たらなかつたのか、飛行機は通り過ぎたけれど、怖くてしばらく動けなかつたそうです。その後食べた芋の、ざらざらしたのどごしを今でもはつきりと覚えていると、祖父は遠い目をしつて言いました。

当時、祖父は、まだ五才です。どんなに、怖かつただろうか、

私には想像もできません。

だから祖父は、今も芋を食べないのではなく、食べることができないのです。

祖父が生きていてくれたから、私が生きています。私は祖父の、死と隣り合わせだった過去を知り、それでも必死で生きぬいてきてくれたことに感謝し、それを後世に伝えていこうと思います。戦争は終わって何十年経っても、人の心を傷つけたままであることを、戦地に兵として行って戦った人だけでなく、経験した人みんなを一生苦しめることを。伝えることで、気持ちを少しでも共有したいです。

最近、ロシアとウクライナが戦争をしています。その影響で、国内では小麦製品やガソリンの物価がひどく上がり、自動車や家電の製造に必要な半導体や、齒科治りようが必要なパラジウムが不足しています。他国同士の戦争でも、こんな風に生活に影響し、世界中の国々が、どちらに協力したとかで、もめたり反発したりして、どんどん不幸に向かっています。

このように、戦争は人の心を傷つけ、生活にも影響し、さらなるもめ事を発生させるのです。

私達は、二度と戦争を起こしてはいけません。そのため私達は、戦争について学び、後世にも伝え続けていきたいです。

優秀賞

世界中の人々の心に平和を

鹿屋市立吾平中学校 三年 本城 恵子

「平和とは何か。」そう問われたとき、あなたは何を思い浮かべるだろうか。

戦争のない世界。世界中の人が仲良しな世界。様々な考えがあるとと思う。辞書を引くと、「もめごとや対立、騒動などがなく、穏やかで落ち着いていること。戦争、戦闘が行われずに世の中が静かに治まっていること。」とあった。その通りだが、あまりにも抽象的だと感じるのは私だけだろうか。確かに戦争をなくすことはとても大事なことだが、私が「平和」とは何か、と考えたときに、まず頭に浮かんだのは「いじめ」のことだった。一見異なる問題のようだが、これらは大きく関わりがあると感ずる。いや、他人への「差別」の意識が原因という根本的な部分でつながっていると思う。

私は、実際にいじめを目にしたことがあるし、いじめのようなものにあつたこともある。その子は、他の人より小柄というだけで悪口を言われ、からかわれ、けなされていた。私は転校生だったからだろうか。話しかけられるのだが、その内容が数人、悪口に変わり、けなされ、授業妨害され、自殺しようかなと思うぐらい追い詰められたことがある。今すぐいじめ認知件数と自殺件数を調べてほしい。五十万件以上のいじめと、三万人近くの自殺件数が報告されていることがわかる。狭い心、いばる心、しつと、そのような低次元の感情がこのような

事態を引き起こしているのだと思う。

私の好きな言葉の一つに「桜梅桃李」がある。桜には桜の美しさがあり、梅には梅の香りがあり、桃には桃の彩りがあり、李には李の味わいがあるの同じように、人それぞれに使命があり、個性があり、生き方がある。それを認め、尊重することが大切だという意味をもつ言葉だ。しかし、人間は違いを尊重できず「差別」や「いじめ」をしたりする。先に挙げたいじめをうけている子も、他の人と違うだけで言葉の暴力を受けていた。それらの延長に「戦争」や「犯罪」もあると思う。人権を大切に、人を尊敬できる自分自身をつくる必要があると考える。

「差別」や「いじめ」は身近なところにある。「いじめは小さな戦争」とも言われるが、そんな戦争が周りで数えきれないほど起こっていることにはあなたは危機感を感じないのだろうか。今、ロシアとウクライナの戦争が重大視されているが、これも国同士の問題ではなく人、一人一人の問題なのだ。人の命を奪うことは絶対に許してはいけないし、正当化されてはならない。自分の命も世界の人々の命も友達の命も平等に尊び、大切にするという心をもつことで、平和へとつながると思う。

心こそ大切。遠回りのように思えるが、自分や身近な一人一人の命や心を大切にすることが平和への近道だと私は考える。世界中の人々の心に平和を。

高校生の部

最優秀賞

写真から伝わる覚悟と平和

鹿屋市立鹿屋女子高等学校 三年 上 村 彩 花

私の祖父は面白い人だ。私はお笑いや面白いことが好きなので、よく祖父の家に行って話をしてもらっていた。ある日、祖父の家に行き、いつも通りテレビを見ながら話をしていた。テレビでは、ウクライナとロシアの戦争のニュースが流れていた。じいちゃん、生まれて初めて本当の戦争を見たよと祖父が独り言のように言った。私はそれを聞いて、どんなことも笑い飛ばしてしまう祖父がいつもと違っていていることに、どきっとしてしまった。

祖父の独り言を聞いて一ヶ月が経ったころ、私は祖父の家に行った。その日もまた、戦争のニュースが流れていた。私は普段何も置いていない机に紙と写真があるのに気づいた。見てみると和紙にびっしりと達筆な字が並べてあり、全く読めなかった。祖父は写真に写る飛行機とその横にいる男性を見ながら、これはね、と話しはじめた。

びっしりと達筆な字が並べてあった和紙は戦争に行つて亡くなった、祖父の父の弟である、袈沙吉^{けさきち}さんが書いた遺書らしい。遺書は、妹や弟、両親へ向けての感謝の言葉、今後のことについて書いてあるようだ。何も言えない私を見て祖父は一息つき、また話しはじめた。

袈沙吉さんは、自ら陸軍航空兵に志願し、飛行兵になった。飛行兵になって一番最初に飛んだのは故郷の空だと言う。故郷を上から見た景色や気持ちはどんなものか気になった。袈沙吉さんはその後、中国やインドネシアにらっかさん部隊を輸送機で運んでいた。らっかさん部隊というのは、パラシュートを背負って銃を持ち、輸送機から飛び降りて地上戦をする人たちのことを言う。自分の操縦する飛行機に、これから戦い、死んでしまう人に乗せているという状況で、袈沙吉さんはどんなことを考えていたのだろうか。私はその状況を想像しただけで頭は真っ白になり、息は止まったかのように苦しかった。

話を聞き終え、車で家に帰るまでの六十分間、私は袈沙吉さんのことで頭はいっぱいだった。沢山考えていく中で一つ疑問をもった。自ら飛行兵になり死ぬより、家族と最後まで過ごし、死ぬなら一緒によかったのではないかと。私は写真を思い出した。飛行機と一緒に写る袈沙吉さんは、覚悟はできているぞと伝わるような顔でこちらを見ていた。その顔はとても凛々しく、カッコいい。

それから二週間が経ち、祖父に会いに行った。いつもと変わらずテレビを見ながら、学校であったことなどを話す。テレビでは戦争のニュースが。お互い何も言わないが考えていることは同じだと思う。きっと、早く戦争が終わるのを願っているはずだ。袈沙吉さんのように覚悟をしてまでも戦争をしなければいけない人は一人もいてはならないはずだ。

戦争のニュースを見かけるたびに袈沙吉さんを思い出し、一刻でも早くみんなが平和な日々を過せるよう、私は願うばかりだ。

つなぐ

兵庫県立北条高等学校 二年 衣川 心音

初めて遺書を読んだときの衝撃を私は今でも覚えています。

戦争はいけません。戦争はだめです。多くの人がそう思っているでしょう。私もそう思っていました。今までの私には、どこか他人事で、つくり話を読むような気持ちがあったように思います。しかし特攻隊の方々の遺書を読んだとき、私の気持ちは一変しました。家族への感謝、飛び立つ覚悟、もうすぐ生まれてくる我が子の名前。そこには、簡単には言い表せない様々な思いがこぼられていたのです。本当にあつたんだ……。そう思いました。戦争も特攻作戦も、紛れもない事実であると感じ、今まで自分は他人事のみでみていたのだと気づかされました。そのくらい、気づけば感情移入していました。

そして、遺書を読んで気づいたことがあります。それは感謝や覚悟ばかりで、不安な気持ちなどは書かれていないことです。私はどうしても、遺書に書いてあること全てが本音だとは思えません。どの特攻隊員にも大切な家族や友人がいたはず。子どもが生まれるのを楽しみにしていた人も、大きな夢をもっていた人もいたでしょう。そんな中で特攻に行かなければならず、苦しさや悔しさが本当に沢山あったと思います。それでも本心だけでは遺書を書くことができなかつたと思うと苦しくて仕方ありませんでした。もし自分がその立場だつたら、また家族だつたら……どちらの立場でも堪えられる自信は

ありません。そして、特攻作戦なんてなければ戦争なんてなければと思わずにはいられません。しかし世界では今も戦争が起こっています。皆さんは今の世界の状況をみて他人事のように捉えていませんか。自分の国じゃないからと、目を背けてはいませんか。

忙しい日々の中でいつの間にか忘れてしまいかもしれません。いくら考え続けても戦争で散った命が帰ることはありません。しかし、ふと立ち止まってふり返り考えることは、今の私たちを見直すことにつながると思います。狭い視野で物事をみてはいないか、人を思いやることはできているか、見直すことは大切です。一人が一人を大切にすることの小さな気持ちがつながって、大きな平和の輪をつくっていくのだと思います。

私はうずらの班の一人として、加西市にある鷺野飛行場のガイドをさせていただくことがあります。戦争の事実をつなぐ、戦争を体験した方々の思いをつなぐ。自分のことばでつなぐ。私が特攻隊の方々の遺書を通して感じたことを胸に、誰かへ、そして次の世代へとつないでいきます。

戦後七十七年を迎える日本で、今私たちができることは、「つなぐ」ということではないでしょうか。今隣にいる人、目の前にいる人を、大切にしながら。

優秀賞

変えなければいけない未来

鹿屋市立鹿屋女子高等学校 三年 尾崎 妃夏

私には、戦争を体験している曾祖父父母がいます。その曾祖父は実際に戦場へ行き、訓練をしたことがあります。そんな曾祖父父母は、今のロシアとウクライナの戦争をどう思っているのかと聞いてみたかったのですが、二人とも老人ホームにいて面会できる日時が決められていて話すことができなかつたので、私の祖母にどう思いか聞いてみました。

私は、小さい頃から曾祖父から戦争の話聞くのが好きで小学校から毎年、曾祖父父母から教えてもらった話を作文に書いています。もちろん、私の祖母も聞いていたので一番最初に曾祖父父母の気持ちを考えたときに浮かんだ言葉は「またか。」という事です。私が曾祖父父母から聞いて衝撃だったことが幾つもあります。まず一つ目は、人間爆弾「桜花」という爆弾がつまれている小型のロケット機に人が乗って相手の国の船に追突するように直前まで自らの手で操縦するというような悲惨なことが行われていたということです。そして一番驚いたのは、その人間爆弾「桜花」に私の曾祖父も乗っていたかもしれないということです。私の曾祖父が乗る日の前日に終戦だったので助かりました。ですが、曾祖父の戦友は沢山亡くなってしまうたそうです。

そして二つ目は、軍のえらい人に「お国のために死んでくれ。」と直接言われたということです。今の日本で、そんなこ

とを言われたら大変なことになるけれど、昔ではそれがあたりまえだったと思うと時代は変わったなと思いました。

今も沢山の国で必要のない戦争が行われています。私は、生きていく上で戦争ほど必要のないものはないと思っています。ですが、先日ニュースでプーチン大統領の支持率が八十パーセントを超えたというのを見ました。何故、戦争を止めないような人に賛同するのか私にはどうしても分かりません。ただ、戦争をすることは良くないことだと思います。



優秀賞

「今」できることを

兵庫県立北条高等学校 二年 岡 本 琉 奈

私たちの大切な地元、加西市。小さい頃から毎日見てきたのどかな田園風景。高い建物はなく、豊かな自然の中でキジバトが鳴き、小さい虫や少し大きい動物と人間が上手く共存している。そんな平和なこの地に、戦争の跡が色濃く残っていることを知っていますか。

加西市にある戦争遺跡、鶉野飛行場では戦時中、特攻隊の若者が乗る戦闘機が作られていました。戦闘機に乗った若者たちは決死の覚悟で飛び立ち、自分を犠牲にして国を守ります。これを知った時、戦闘機を作っていた人たちはとても複雑な気持ちを抱えていたのではないかなと思いました。なぜなら、自分が作った戦闘機が敵軍の罪のない兵士の命を奪い、さらには日本の未来ある若者の命をも奪うことになるからです。そして、当時の人々は実際にどんな気持ちで働いていたのが気になり、戦争体験者の生の声を聴いてみたいと思いました。ですが戦争体験者の方々の高齢化により、貴重なお話を聴けるチャンスがどんどん減っているというのを知り、ショックを受けました。そして、戦争体験者の方々の生の声を聴けるのは、「今」しかないのだと思います。

そこで、先輩方が行った戦争体験者の方へのインタビュー映像を見ると、今がどれだけ平和なのかを痛感しました。また、自分たちが何気ない日常だと思っているこの風景は当たり前

ではなく、有難いものであるということも学びました。そして、今この瞬間も刻一刻と過ぎ去っている「今」という時間を大切にしていかなければならないと感じました。

また、今までは戦争に無関心でしたが、高校で放送部に入ってから鶉野飛行場のツアーガイドイベントでに参加する機会を得ました。その時間いた話も印象的です。

「今、戦争体験記として残っているのは有名な人のもの。それも大切だが、地方で国のために尽力した人たちの話こそ大切に守っていかなければならない。」

これを聴いて、戦争体験者の生の声を残す活動の大切さを再確認しました。

この出来事から、戦争体験者の生の声を残す活動に積極的に参加してみたいと思うようになりました。戦争体験者の声は財産です。この財産を若者ならではの視点で聴き集めるために、まずは私たち自身が知る必要があります。私もまだまだ知らないことばかりですが、高齢者の方々に高校生でも信頼していただけのように、知識をつけていっています。

終戦から七十七年。忘れられ、無くなっていきつつある戦争の記憶。世の中が平和になるために、私たちの世代だからこそできることがあるはずです。戦争を過去の出来事で終わらせないために。大切な「今」をよりよく過ごすために。戦争を平和へとつなげていきませんか。

英語部門 – 最優秀賞 –

(日本語訳：次ページ)

To the World My Great Grandmother Hoped

Yamada Junior High School 3rd grade

Hinata Aso

My great grandmother passed away about 4 years ago. She always smiled and there were always a lot of people around her. I used to talk to her about my school life. She looked happy when she listened to my stories. I loved her very much.

When I was a 6th grade student in elementary school, I studied about "the war". I talked to my grandmother about this class. Then she told me that my great grandmother had some diaries. They were about the war and her life 77 years ago. At first, I was scared to read these diaries, but I decided to read it thanks to my family's advice. The diary says, "I saw that my house had been destroyed by a fierce fire as I finished crossing the Kotsuki river. It was my lovely house that we had moved into soon after getting married. All my wedding outfits, wardrobes, a dresser, clothes and diaries filled with memories were burnt to ashes. My hatred for our enemies grew bigger." These sentences were written on June 17th in 1945 after the major air raid on Kagoshima. I felt frightened by her words because they didn't seem to match the image of my great grandmother. Can you imagine your precious things being destroyed right in front of you by this overwhelming huge power? Can you imagine losing people that you always talk with so suddenly? I think it is difficult for people living in Japan during the Reiwa period because we Japanese people appear to live in a safe place that is highly advanced and has no war. But is that really true? We need to think about the global situation.

Some countries and areas are moving away from peace now. The latest example is Ukraine. The Russian army has invaded Ukraine. Every day, I hear tragic and unbelievable words on TV, newspapers and Internet. Death, torture, weapons; these words always make me disappointed. A few months ago, I saw a woman's interview shot underground in Ukraine. She said, "I lost many precious things." At that very moment, I thought she was exactly like my great grandmother. My great grandmother, 77 years ago and the Ukrainian woman living in this period, essentially had the same experience. I was deeply shocked because the world has not changed at all.

If my great grandmother had seen today's situation, she would be so disappointed. That's why I am here. That's why I made up my mind to say something. "I would like to pass my great grandmother's memories down to the next generations." This is my message for her. I think she hoped to see a world that is free from the same violence she saw while crossing the Kotsuki river. Her diaries described her agony and her earnest hopes for the future. It is my turn to hand them down to my generation.

I am a member of school council. In the meeting, I often show some articles about the war to all students. They always write down their feelings and share them to others. Like you see, I can make small but positive change into our school. I know it is a small step and won't directly change the global situation right now. However, someone might understand my thoughts if I tell them from the bottom of my heart. Someone who listened to my way of thinking might pass it on to the next generation. I'm sure that these sequence of events will never stop, and will continue to affect the global landscape.

曾祖母が願った世界へ

始良市立山田中学校 三年 阿蘇 ひなた

私の曾祖母が亡くなったのは約四年前。彼女はいつも笑顔で、周りには多くの人がいました。私は学校生活についてよく彼女に聞いてもらっていました。私の話を聞く時、彼女は幸せそうでした。私は曾祖母が大好きでした。

小学六年生の時、私は戦争について学びました。私はそのことを、祖母に話しました。その時、祖母から、曾祖母の日記の存在を聞いたのです。その日記は戦争と七十七年前の彼女の生活を記したものでした。私はその日記を読むのが怖かったけれども、家族のアドバイスもあり、読んでみることに決めました。その日記には、「やつと渡り我が家を見ると物凄い勢いで燃えている。思い出深い新婚の家、大好きだった。嫁入り道具全て、ダンス、鏡台、衣類、思い出の日記帳、灰と化してゆく。まったく敵への憤慨の心が大きくなってゆく」と書かれています。この文章は鹿児島大空襲後の一九四五年六月十七日に書かれたものです。私はこの言葉を見て恐怖を感じました。なぜなら、その文章が私の曾祖母のイメージと合致しなかったから……。あなたの大切な物がどうしようもなく巨大な力によってあなたの目の前で壊されていくのを想像できますか。よく話をしていた人が突然いなくなる様子を想像できますか。令和の日本を生きる人にとって、それは難しいことだと思います。なぜなら、我々日本人は高度に発達し、戦争がない安全な場所に生きていくように見えるから。しかし、それは真実でしょうか。我々は世界の情勢に目を向ける必要があると思います。現在、世界には平和から遠のいている国や地域があります。

最近の例で言えば、ウクライナでしょう。ロシア軍がウクライナへ軍事侵攻しました。毎日悲劇的で信じられないような言葉をテレビ、新聞、インターネットで見たり、聞いたりします。「死、拷問、武器」これらの言葉はいつも私を落胆させます。数か月前、ウクライナの地下で撮られた女性のインタビュを見ました。「多くの大切なものを失った。」と彼女は語っていました。ちやうどその時、彼女が私の曾祖母と全く同じだという感覚に襲われたのです。七十七年前の曾祖母と今を生きるウクライナ人女性が、本質的に同じ体験をしている。この事実にはとてもショックを受けました。世界は七十七年前と全く変わっていないから。

もし曾祖母が今の状況を見たら、彼女はひどく落胆したことでしょう。だから私は今ここにいます。だからこそ、私は「伝える」決心をしました。「私は次の世代へとあなたの記憶を受け継いでいく」。これが私の曾祖母へのメッセージです。曾祖母が甲突川を渡りながら見た暴力、それと同じような残酷な行為から解放された世界を彼女は願っていたはず。彼女の日記には、その苦悩と未来への切実な希望が記されていました。次は、私が、私の世代へとそれを伝えていく番です。

私は生徒会本部の一員です。全生徒に対して、戦争の記事を紹介することがよくあります。彼らは、その記事に対する自分の気持ちを文字にし、それを仲間と共有しています。今紹介した通り、私には小さいけれど、前向きな変化を学校内に起こす力があります。それは小さな一歩で、直接的に世界情勢を変えられることができないことは分かっています。しかし、私が心の底から伝えれば、私の考えを誰かが分かってくれるかもしれない。その誰かが、私の伝えた考えを次の世代へと繋いでくれるかもしれない。繋いだ流れは決して止まることなく、世界の景色へ影響し続ける。私はそう確信しています。

英語部門 – 優秀賞 –

(日本語訳：次ページ)

Destination of Peace

Chikuyo Gakuen High school 2nd Grade
Kanae Haruyama

What is peace? When I was asked this question in elementary school, I could not answer anything. Perhaps I was spoiled by an environment in which I could have anything I wanted. However, I would never be able to say that the current situation is still peaceful. The invasion of Ukraine, the assassination of a former prime minister, violent crimes, and other news so painful that I want to cover my ears in my daily life. It is precisely because of this that I have decided to reconsider the meaning of peace. True peace cannot be realized without regaining a sense of peace that is fading away. I believe that the answer to this question can be found 77 years ago.

I would like to tell you a story about my great-grandfather. My great-grandfather, who lived in Kagoshima and is now deceased, told me about the war when I returned home once a year. He told me, "I would have done anything to live. Someone I knew became a Kamikaze pilot and never came back. I was the one who survived." With a gloomy face, my great-grandfather told me. He took me to the Kanoya Air Base Museum, which was located nearby, when I was in elementary school and had never heard of the war. Since there was only one Kamikaze base in Kagoshima, the U.S. military's attacks on Kagoshima were so intense that they could not be compared to those in other regional cities. After watching a mini-theater about the Kamikaze pilots, my heart ached from the sheer cruelty of it all. Saddened, I held my great-grandfather's hand tightly and then he said to me, "I hope you can hold on to the feelings you have now for a long time to come." My great-grandfather looked straight ahead, but I still remember that his eyes were full of tears..

I am now a high school student. What can I do? After much deliberation, I decided to run for the Peace Messengers, and the other day I became a Peace Messengers. In the course of my activities as an Peace Messengers, I was astonished at the lack of opportunities for peace education in recent years. I heard that my brother had a peace study in Nagasaki, but it lasted only one hour. It is too terrible that the memory of war continues to fade away. Just as my great-grandfather entrusted me with his legacy, I would like to expand the memory of the war, even if only gradually. To know the past is to know the present.

Even if I do nothing now, there will certainly be a peaceful everyday life. However, there is a future that will surely change if I am aware of it now. What does it matter if we are powerless? We are too young to give up and say we are powerless. Why don't we take an interest in the past and in the problems that are happening now? If we gather the pieces of our interest one by one, a big puzzle will be completed. Why don't we make war a personal matter, instead of something else? Now I can give an answer to question, what is peace? Is peace only based on someone else's sacrifice and shed blood? No, it is not. It is based on people's happiness in their daily lives. When this appeal reaches someone, I can proudly say that another piece has been filled in and that we are one step closer to a lasting peace.

平和の目的地

福岡県筑陽学園高等学校 二年 春 山 夏菜絵

平和とは何か。私は小学生の頃、そう問われたとき何も答えることができなかった。何でも望めば手に入る環境に私は甘んじていたのかもしれない。だが、現在の情勢をもってして未だ平和と私は決して言うことはできないだろう。ウクライナ侵攻、元首相の暗殺、凶悪犯罪など日常の中に耳を塞ぎたくなる程辛いニュースが溢れてしまった。そんな今だからこそ私は、平和とは何かをもう一度問い直すことにした。薄れつつある平和意識を取り戻さずして、真の平和は実現するはずがない。この答えは、七十七年前にあるのではないだろうかと思はる。

ここで私の曾祖父話をしたい。鹿児島に住んでいた私の曾祖父は今亡くなってしまったが、年に一回帰省する私に戦争のことを教えてくれた。「生きるためならなんでもやった。知り合いが特攻隊員となり、二度と戻ってくることは無かった。私なんか生き残ってしまった。」と、暗い顔で曾祖父は語っていた。そして曾祖父は、戦争を知らなかった小学生の頃の私を近所にあった鹿屋航空基地史料館に連れて行ってくれた。特攻基地は鹿児島にしかなかったの、米軍の鹿児島に対する攻撃は他の地方都市と比較にならない激しさであった。特攻隊についてのミニシアターを観た後、私はあまりの無惨さに胸が痛くなった。悲しくて曾祖父の手を強く握ると、「今の気持ちを

これからもずっともち続けてほしい。」と曾祖父は私に言った。曾祖父は真つすぐ前を見ていたが、目元にいっぱい涙が溜まっていたことを今でも覚えている。

私は今、高校生となった。自分に何ができるのだろうか。私は悩んだ末に、平和大使に立候補し、先日晴れて平和大使となった。平和大使として活動していく中で、近年の平和学習の機会の少なさに驚愕した。弟は長崎にて平和学習をしたらしいが、その時間はわずか一時間であった。戦争の記憶がそのまま風化していくのはあまりにも惨すぎる。曾祖父が私に遺志を託してくれたように、少しずつでもよいから戦争の記憶を広げていきたい。過去を知ることが、現在を知ることにもなるのだから。

今何もしなくても確かに穏やかな日常はあるだろう。だが、今自分が意識することによって確実に変わる未来がある。微力だから何だというのだろう。無力だと諦めるには私たちは若すぎる。過去を、今起きている問題に、関心をもっていかないか。一つ一つの関心のピースが集まれば大きなパズルが完成する。戦争を、他人事から自分事にしていかないか。今私は、平和とは何かという問いかけへの答えを言うことができる。平和とは、誰かの犠牲や流した血の上には成り立たないのか。いや違う。人々の幸せと思える日常の上に成り立つのだ。誰かにこの訴えが届くとき、またピースが埋まっていったと、恒久的な平和に一步近づいたと、私は胸を張って言えるだろう。

英語部門 – 優秀賞 –

(日本語訳：次ページ)

Peace is the way

National Taipei University of Education Experimental Elementary School 6th Grade
Peng Suan Qiu(Madeline)

Peace is a dream within our reach but always seems so far away. If we learn from history, we will see that even though fear is the fastest way to control, it isn't the only solution. That is because hatred made us revenge on each other, and it only creates a vicious circle. I believe we can start a new chapter of our lives by working together. If we do so, we will be one step closer to the goal we are aiming for.

My idea of peace is to share joys and sorrows, and help support each other, because everyone is working toward the same goal, staying alive, since our world still has a lot of problems waiting for us to solve. I think war is how strong countries force vulnerable countries to give in, but what if they simply talk or try to negotiate? Could there have been a different result? This tells us that peace can be achieved if you truly want to, our past is here to tell us the mistakes we used to make, and if we look for them, there is always a clue hidden within.

Would you hate someone you never met and know anything about? I think most people would answer no because you have no reason to hate them. Everyone has a family to protect, so what if your lives were threatened and by hating innocent people you would be saved. Would you hate them? One of my favorite books is "The diary of a young girl" it tells the story of Anne Frank; I don't think it was fair that the Jews were discriminated against and massacred just because they were Jews. That wasn't either reasonable or moral. If I were Anne, I would forgive the person who told the secret police because he just wanted to protect his loved ones. The real criminal is the person behind everything as they were the ones. The real criminal is the person behind everything as they were the ones who made everyday citizens go opposite to each other. I remember that Confucius once said always treat others as you want them to treat you. This sentence means to have empathy for people who are having a hard time. We should try to put ourselves into someone else's shoes, for this is another step towards peace.

An important part of peace is having respect for others and learning to have tolerance. If we respect their culture and beliefs, we will find similarities between each other. Maybe there is something we can learn from our differences, such as we can share things they don't know. Many people around the world are lending a helping hand to make this world a better place, and our world can be more peaceful by doing this. We can join them, and together we can change this world our hands. A little help can make a big difference. Let's start now! It isn't too late. There is no way to peace because peace is the path we are walking, and it's not an impossible dream.

平和は道である

国立台北教育大学附属小学校 六年

Peng Suan Qiu (Madeline)

平和は私たちの手の届くところにある夢ですが、いつもとても遠くにあるように思えます。もし私たちが歴史から学べば、たとえ恐怖が支配への最短距離であったとしても、それが唯一の解決策ではないことが分かるでしょう。それは、憎しみが私たちに復讐心を抱かせるからです。そして、それは悪循環を生み出すだけです。私たちは、互いに歩み寄り、力を合わせることで、目指すべきゴールへの一步を踏み出すことができると信じています。

私の考える平和とは、喜びや悲しみを分かち合い、支え合うことです。この世界には、みんな同じ目標に向かって、生き続け、まだまだ解決しなければならぬ問題がたくさんあります。私は、強い国が弱い国を屈服させるのが戦争だと思いません。しかし、もし私たちが、もっと単純に話し合ったり、交渉したりしたらどうでしょうか。違う結果をもたらすのでしょうか。このことは、私たちに、平和は本当に望むなら達成できること、私たちの過去は、私たちがかつて犯した過ちを教えてくれるものであり、もし、私たちがそれらを探しだせば、必ず手がかりがあることを教えてくれていると思います。

あなたは、会ったこともなく、何も知らない人を嫌いになりますか。ほとんどの人が「いいえ」と答えると思います。なぜなら、嫌う理由がないからです。誰にでも守るべき家族があります。もし自分の命が脅かされたらどうでしょう。無実の

人を憎むことで、あなたは救われるでしょうか。あなたは彼らを憎みますか。私の好きな本のひとつに「アンネフランクの日記」があります。その本には、ユダヤ人がユダヤ人であるという理由だけで差別され、虐殺されたのは不公平だと書いてあります。それは合理的でも道徳的でもないとあります。もし私がアンネだったら、秘密警察に話した人たちを許します。なぜなら、自分の愛する人を守りたかっただけだから。本当の犯罪者は 市民を対立させた背後にいる人物なのです。そういえば、孔子が次のように言っていたのを思い出しました。「自分がしてもらいたいように、他人にも接しなさい。」この言葉は、「辛い思いをしている人に共感しなさい」という意味です。私たちは、他人の立場になって考えなければなりません。それが平和への第一歩です。

平和のために大切なことは、他人を尊重し、寛容さを身につけることです。相手の文化や信念を尊重すれば、お互いの共通点を見つけることができます。もしかしたら、相手の知らないことを共有することができると、違いから学べることがあるかもしれません。世界中の多くの人がこの世界をよりよい場所にするために、力を貸そうとしています。そうすることで、私たちの世界はより平和になるのです。私たちもその一員となり、私たちの力で、この世界を変えることができます。ちよっとした協力で、大きな変化をもたらします。

今、はじめましょう。

今からでも遅くはありません。

平和は私たちが歩んでいない道ではありません。

平和は私たちが歩んでいる道のりそのものです。

そして、平和の道をつくっていくことは、不可能な夢ではないのです。

平和へのメッセージ応募作品数・応募校

1 応募校・作品数

	応募校数 (校)	応募作品数 (点)
小学校 5・6年生の部	35	1,254
中学生の部	21	2,348
高校生の部	2	41
英語部門	5	505
計	63	4,148

2 応募校

(日本語部門)

【小学校】 (鹿屋市内 23 校、県内 (鹿屋市は除く) 8 校、県外 4 校 合計 35 校)

鹿屋市立鹿屋小学校	鹿屋市立祓川小学校	鹿屋市立東原小学校
// 笠野原小学校	// 寿小学校	// 寿北小学校
// 田崎小学校	// 西原小学校	// 西原台小学校
// 花岡小学校	// 野里小学校	// 大始良小学校
// 南小学校	// 西俣小学校	// 高隈小学校
// 大黒小学校	// 輝北小学校	// 串良小学校
// 細山田小学校	// 上小原小学校	// 吾平小学校
// 鶴峰小学校	// 下名小学校	
鹿児島市立田上小学校	鹿児島市立前之浜小学校	鹿児島市立大明丘小学校
枕崎市立枕崎小学校	伊仙町立馬根小学校	指宿市立丹波小学校
霧島市立高千穂小学校	東串良町立柏原小学校	
大分県宇佐市立八幡小学校	大分県宇佐市立駅館小学校	兵庫県姫路市立白鷺小中学校
熊本県錦町立一武小学校		

【中学校】 (鹿屋市内 12 校、県内 (鹿屋市は除く) 5 校、県外 4 校 合計 21 校)

鹿屋市立鹿屋中学校	鹿屋市立鹿屋東中学校	鹿屋市立第一鹿屋中学校
// 田崎中学校	// 大始良中学校	// 花岡中学校
// 高隈中学校	// 輝北中学校	// 串良中学校
// 細山田中学校	// 上小原中学校	// 吾平中学校
鹿児島市立伊敷中学校	鹿児島市立東谷山中学校	鹿児島市立緑丘中学校
出水市立米ノ津中学校	いちき串木野市立羽島中学校	
兵庫県加西市立善防中学校	兵庫県加西市立北条中学校	兵庫県姫路市立白鷺小中学校
大分県九重町立ここのえ緑陽中学校		

【高等学校】 (鹿屋市内 1 校、県外 1 校 合計 2 校)

鹿屋市立鹿屋女子高等学校
兵庫県立北条高等学校

(英語部門)

【小・中・高】 (鹿屋市内 1 校、県内 (鹿屋市は除く) 2 校、県外 1 校 外国 1 校 合計 5 校)

鹿屋市立鹿屋中学校	始良市立山田中学校
鹿児島大学教育学部附属中学校	国立台北教育大学附属小学校
福岡県筑陽学園高等学校	

講評（日本語部門）

鹿児島大学教授 上谷 順三郎

令和四年度も三年目となるコロナ禍が続いています。マスク生活の中でも児童生徒たちはがんばっているのですが、その日常生活にはさらにロシアによるウクライナへの軍事侵攻のニュースが加わりました。それでも、二〇二一年は東京オリンピックが開催されました。そして鹿児島でも、今年「かごしま総文（第四七回全国高等学校総合文化祭）」、二〇二三年は鹿児島国体の開催が予定されています。



未来に向かって歩み続けるためには、平和への願いを込めた作文を書き、またそれらの作文を読むことで、子供と大人が一緒になって平和を求めて進んでいく必要があるのではないのでしょうか。

では、以下に日本語部門最優秀賞作品についての講評を記します。

【小学校五・六年生の部】有嶋航さん 題名「平和の山へ」

航さんの家族は毎月のように一緒に山登りをしているそうです。その山登りが航さんにとっては「平和そのもの」でこれからもそのチャレンジを続けたいと思っているのですが、そんな時に見たウクライナの写真で、その山々に一目ぼれしてしまいます。でも今、そのウクライナでは子どもたちが悲しい思いですごしている。航さんの日常がウクライナとつながり、「平和の山へ」登るために自分にできることは何かを考える日々が、この作文には描かれています。

【中学生の部】石之脇泰牙さん 題名「平和の一步先へ」

平和について自分にできることを探る石之脇さん。その問いは今起きていることを歴史の中で考えることに向かいます。私たち一人一人の過去は違っていても、未来への希望は同じように共有できるといふ思いから、石之脇さんは、戦争による「大きな傷」を忘れないこと、そしてウクライナ問題が突きつける現実に向き合うことを通して、「本当の平和」を目指していくことを誓っています。

【高校生の部】上村彩花さん 題名「写真から伝わる覚悟と平和」

祖父とよく話をする上村さん。祖父と一緒にテレビを見ながら話している場面から、ある写真と手紙を見る場面につながっていく作文です。実は祖父も体験していない戦争のことを、祖父の父の弟の写真と手紙を共有することで上村さんは一緒に考えることになります。「お互い何も言わないが考えていることは同じだと思ふ」と書いていますが、話したり、読んだりして、話題を共有することで感じる共有があり、まさにその共通の体験によって他の人や次の世代の人に伝えていけるものがある、という大きな希望が語られています。

◆◆ 日本語部門最終審査会 審査員 ◆◆

役職	委員名	備考
審査委員長	上谷 順三郎	鹿児島大学教育学部教授
委員	山野 俊郎	南日本新聞社鹿屋総局長
委員	黒江 真一郎	鹿屋市立田崎小学校長
委員	松下 幸男	鹿屋市立吾平中学校長
委員	永迫 昌毅	鹿屋市立鹿屋女子高等学校長
委員	上原 孝夫	鹿屋市教育委員会指導主事

講評（英語部門）

鹿屋体育大学教授 吉重美紀

今この原稿を書いている八月九日は、七十七年前長崎に原爆が投下された日です。研究室でパソコンに向かっていた午前十一時二分にサイレンが鳴るのが聞こえ、黙祷を捧げました。もう二十年以上も前のことになりましたが、八月六日、ニューヨークでバスを待っていた私は、一人の男性が『HIROSHIMA』と書かれた本を小脇に抱えているのを目にしました。日本人



なら誰しも忘れない日だと思いますが、アメリカ人でも覚えている人がいるのだと気づきました。今回の「平和へのメッセージ（英語部門）」は、ロシアのウクライナ侵攻や安倍元首相の銃撃事件を題材にしたものが多かったように思います。もちろん広島と長崎の原爆投下に関するものもありました。小学生から中学生、高校生まで一人一人が、平和について考え、平和への思いを英語で表現してくれました。

最優秀賞を受賞した阿蘇ひなたさんは、曾祖母が日記に残した言葉をきっかけに、戦争が身近な人や住まいなど大切な人や物を奪う悲惨さを、ウクライナに重ねて振り返り、世の中が曾祖母の時代と変わっていない現状にショックを受けたと語っています。そして曾祖母の平和への願いを次世代に繋げていく使命を抱き、生徒会で地道な平和活動が続けていることが述べられています。平和への願いが、見事なパラグラフ構成と分かり易い英文で書かれていて、審査員全員が高得点をつけ最優秀賞に選ばれました。おめでとうございます。

今回の英文メッセージは、学校の課題で取り組まれた生徒さんもいたことでしょうか。「平和の花束2022」が、小中高生が平和について考え家族や友達と話し合うきっかけとなつて、「平和」という大輪の花が咲くことを願ってやみません。

『HIROSHIMA』を抱えバス待つ男あり八月六日のマンハッタンに

（短歌とエッセー華六十九号）

◆◆ 英語部門最終審査会 審査員 ◆◆

	役職	委員名	備考
英語部門	審査委員長	吉重美紀	鹿屋体育大学スポーツ人文・応用社会科学系教授
	委員	田中康裕	鹿屋市立鹿屋女子高等学校教諭
	委員	Lucas Verde	鹿屋市立鹿屋女子高等学校ALT
	委員	山内誠	鹿屋市教育委員会指導主事

「平和へのメッセージ」

スタジオ録音体験バスツアー

平和へのメッセージ最優秀作品と鹿屋市内各小・中・高等学校代表作品を、応募者本人が鹿児島市の南日本放送（MBC）ラジオスタジオで朗読録音しました。

当日、鹿屋市役所に集合した児童生徒は少し緊張した面持ちでしたが、バスの車内では自己紹介やクイズなどを通して会話を交わし、和気あいあいとした雰囲気になりました。

実際にラジオ放送で使われているスタジオで、プロの指導を受けながら作品を朗読収録する大変貴重な体験となりました。

収録された平和へのメッセージを、是非聞いてください。



収録直前 説明を受ける児童生徒



スタジオでの収録

【平和へのメッセージをMBCラジオで放送】

「平和へのメッセージコンテスト」最優秀賞、鹿屋市内各小・中・高等学校代表者の平和へのメッセージを児童生徒自らの朗読で放送します。

☆ 放送期間：令和4年11月 ～ 令和5年7月（全39回）

☆ 放送時間：毎週木曜日 12:55 ～ 13:00



「平和について考える」

私たちのまち
鹿屋に残る戦跡

私たちのまち鹿屋に残る戦跡



「戦争」と聞くと、あなたはどんなことを思い浮かべますか。遠い外国の出来事、ずっと昔の話、ドラマや映画の中のこと…今の自分には関係ないと思う人も多いことでしょう。実は、私たちのまち鹿屋は、太平洋戦争と深い関わりのあったまちなのです。今でも、当時の様子を伝える戦跡が数多く残されています。

ここ鹿屋に住む私たちが改めて戦跡と向き合い、当時の人々に思いをはせることで、平和の大切さを学び、よりよい未来を創造していくことができるのではないのでしょうか。現在も市内に残る戦跡の一部を見てみましょう。

戦跡とは…

戦争が行われたあと。戦争のために作られた施設や、戦争で被害にあった建物などで、現在も残されているもの。

鹿屋基地

昭和十一年、海軍航空隊が開隊されました。太平洋戦争末期には陸海軍の特攻作戦を指揮する司令部が置かれるなど、まさに作戦の中枢を担う基地でした。



当時の鹿屋基地

特攻隊員が最も多く出撃した地「鹿屋」

鹿屋基地は、海軍の重要基地として機能していました。戦争が激しくなってくると「特攻」と呼ばれる攻撃が行われるようになり、九百八名もの特攻隊員が出撃しました。なんと、日本国内の基地で最も多くの特攻隊員を見送った場所なのです。

特攻とは：

特別攻撃の略で、たくさんの爆薬を積んだ戦闘機に搭乗員が乗ったまま敵艦に体当たりさせることを意味しています。搭乗員は生きて帰ることはできないと分かっていたうえで、自分の命と引き換えに攻撃に参加しました。戦況が悪化した太平洋戦争末期に、日本本土へのアメリカ軍上陸を少しでも遅らせることを目的として行われました。

主な戦場となったのは日本の南方海域だったため、鹿児島県など九州南部の基地から多くの特攻隊員が飛び立っていきました。隊員の多くは十代、二十代の若者たちでした。

鹿屋会談

一九四一年（昭和十六年）二月、日本海軍鹿屋基地で極秘に「鹿屋会談」が開かれ、ハワイにある真珠湾を攻撃するための作戦計画が話し合われました。真珠湾攻撃は同年十二月に実際に行われ、この攻撃をきっかけに日本とアメリカは全面的に戦争を始めることになりました。

鹿屋航空基地史料館

当時基地のあった場所は現在、海上自衛隊の航空基地として活用されています。敷地内には鹿屋航空基地史料館があり、当時からの貴重な資料が保存・展示されています。

鹿屋航空基地史料館の二階には、特別攻撃隊委員をはじめ海軍千八十五名（平成二十八年現在）の遺影や家族への手紙など、大変貴重な遺品が展示されており、当時の様子をうかがい知ることができます。



鹿屋航空基地史料館



二式大型飛行艇

また史料館の外には、世界に一機だけ現存する二式大型飛行艇が展示されています。二式大型飛行艇は長距離を飛行することができたため、偵察・哨戒・輸送に大きな力を発揮し、百六十七機が生産されました。

旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者慰霊塔



慰霊塔

鹿屋基地から特別攻撃のために出撃していった若者たちの御霊を祀り、平和の尊さを後世へ伝えるために、一九五八年（昭和三十三年）建立された慰霊塔です。

隊員たちの最後の地となった鹿屋基地を目の前に望む、小高い丘の上に建てられました。塔には九百八名の隊員たちの名前が刻まれています。慰霊塔の周辺は小塚公園として整備されており、市民の憩いの場となっています。また、戦没者追悼式が行われる会場としても知られています。

野里国民学校跡「桜花」の碑

神雷特攻部隊（人間爆弾「桜花」部隊）の隊員たちが宿舎として利用していた野里国民学校（現在でいう小学校）の向かい側に建てられています。隊員たちは教室で寝泊まりし、校庭や周囲の道路で訓練を行いました。昭和二十年三月の空襲により窓ガラスは吹き飛び、天井から屋根まで穴が開いて空が見えるほど、校舎は荒れ果てていたそうです。

終戦後、学校は移転したため当時の建物は、今はなく、国旗掲揚台の土台だけが当時の様子を伝えていきます。

隊員たちが出撃の朝に整列し、残る仲間たちへ別れを告げた場所に「桜花」の碑が建てられています。



桜花の碑



当時から残る国旗掲揚台の土台

笠野原基地

もともとは農地だった場所に、地域住民を含め多くの人が動員されて整備された飛行場です。一九二二年（大正十一年）に運用を開始し、真珠湾攻撃に参加した部隊もここから出撃しました。一九四五年（昭和二十年）三月十八日の空襲で、この基地の施設の多くが壊滅的な被害を受けました。終戦後に払い下げられ、現在は農地や住宅地として利用されています。

川東掩体壕

掩体壕とは、戦時中に航空機や物資などを敵の攻撃や爆風から守るために作られた施設です。土をコの字型に盛ったもの（無蓋掩体壕）からコンクリート製のもの（有蓋掩体壕）まで、たくさんのもので、掩体壕が基地の周辺に建設されました。掩体壕づくりには大人から子どもまで多くの人が動員されました。

この川東掩体壕は、笠野原飛行場で使用されていたもので、零式艦上戦闘機（零戦）が入れられていたといわれています。現在はひとつだけが残っており当時の様子を今に伝えています。当時の鉄筋不足を補うためか、中に玉石が混ぜられていますのを見ることができます。



玉石の混じったコンクリート



川東掩体壕



イメージ図

串良基地

第二次世界大戦の末期に教育航空隊として開隊され、約五千名の飛行予科練習生が、航空機の整備、搭乗、通信等の猛訓練を受けたところです。

戦争が激しくなってきた昭和十九年四月には実戦部隊に編入され、さらに、昭和二十年三月一日からは特別攻撃隊の基地となりました。終戦までの半年間に特別攻撃隊の三百六十三名、一般攻撃隊二百十名、合計五十六名の最期の地となりました。



串良平和公園 慰霊塔

串良平和公園

串良平和公園は、串良基地の跡地に作られました。公園の中には、串良基地から出撃して帰らぬ人となった隊員たちの霊を慰めるために、慰霊碑が建立されています。

当時滑走路だった場所は、今も公園内の道路として残っています。先が見えないほどまっすぐに伸びた道路は、当時の名残を感じさせます。現在は桜の名所として知られ、周辺は球場やプールなどが整備されて多くの人に利用されています。



滑走路跡の道路

串良基地跡地下壕第一電信室

串良基地の関連部隊との連絡が行われており、特別攻撃隊員が突撃前に送る最後の電信（モールス信号）を受け取っていた場所です。当時この電信室で勤務していた元隊員の証言によると、地下壕内には受信機や送信機のほか、電話や発電機などが配備されていたようです。



地下壕入り口の階段



地下壕入り口の防御壁と土塁



通信室内部の現在の様子

二カ所の出入り口付近には空襲対策として、爆風をよけるための防御壁と土塁がそれぞれ設けられています。特別攻撃隊員との電信に使われた地下壕施設の中でも保存状態が良好であり、戦争の記憶を後世に語り継ぐ貴重な戦争遺跡となっています。

金浜海岸 進駐軍上陸地の碑

昭和二十年九月三日に進駐軍の先遣隊が鹿屋基地に降り立ちました。そして翌四日、進駐軍アメリカ海兵隊二千五百人が高須の金浜海岸に上陸しました。

当時、鹿屋の多くの人々が進駐軍を恐れ、山間部に逃れたと言われています。金浜海岸には記念碑が建てられています。



進駐軍上陸地の碑



現在の金浜海岸

高須海岸 トーチカ跡

高須海岸から上陸してくる敵を見張るための観測所として作られました。目立たないようにするため、大きな木の根元に隠れるようにして、海に向けて小さなのぞき窓が作られています。当時の様子を伝える貴重な史跡です。



トーチカ跡



鹿屋航空基地史料館内に展示されている零戦

このように、現在でも鹿屋市内にはいくつもの戦跡が残されています。戦跡の残るまちに住む私たちが、これらの場所を実際に訪れることで、これからの平和を作っていくために何ができるのかを考えることが大切です。



ついらくちてんひ
B29 墜落地点の碑



くしらへいわごうえんいれいとう
串良平和公園慰霊塔



ちかごうだいいちでんしんしつ
地下壕第一電信室



きゅうだんやくこだんこんあと
旧弾薬庫弾痕跡



かわひがしえんたいごう
川東掩体壕



鹿屋市の戦跡MAP

かの や こう くう き ち し り ょ う か ん
鹿屋航空基地史料館

せん ぼつ しや い れい とう
戦没者慰霊塔
こ づか こう えん
(小塚公園)



おう か ひ
桜花の碑



しん ちゅう ぐん じょう りく ち ひ
進駐軍上陸地の碑



たか す あと
高須町のトーチカ跡





KAGOSHIMA
KANOYA

HYOGO
KASAI



あの空と つながる、 まちひと平和。

平和を願う交流の物語

HYOGO
HIMEJI



OITA
USA



KUMAMOTO
NISHIKI



空がつなぐ
まち・ひとづくり
推進協議会

戦時中に空でつながった、 地域の新たな交流。

太平洋戦争末期、加西市にあった姫路海軍航空隊、そして宇佐市にあった宇佐海軍航空隊では特別攻撃隊が編成され、若い隊員たちは集結した鹿屋市の基地から各地の若者とともに沖縄方面へ出撃していったのです。そんな旧海軍飛行場ゆかりの地として空でつながる地域が、未来に向けて平和ツーリズム普及のための事業を行っています。



公式サイト

空がつなぐまち・ひとづくり推進協議会 事務局・兵庫県 加西市 TEL:0790-42-8700 FAX:0790-43-1800

公共交通機関として、鹿屋地区の皆様をサポートするタクシー会社です

鹿屋第一交通株式会社

鹿屋営業所

〒893-0064
鹿屋市西原1-29-7



タクシーのご用命は
鹿屋地区配車センター

365日24時間対応します
(0994) 42-2161

世界に平和を、子どもたちに愛を！
文具・事務用品・教材・家具・コピー機・OA 機器

株式会社 六宝堂

〒893-0064 鹿児島県鹿屋市西原4丁目10番20号

電話番号▶0994-43-5626

FAX 番号▶0994-43-5646

住まいにさわやかな風と採光を!!

サッシ、ガラス、シャッター、ブロック、エクステリア販売施工

株式会社 園 幸

代表取締役 小園 幸作

鹿屋市共栄町22番20号 TEL (0994) 43-2488番
FAX (0994) 40-2488番

かのや交通株式会社

〒893-0055 鹿児島県鹿屋市野里町4876-5

電話 0994-41-0097 Fax 0994-41-0003

Honda Cars 鹿児島東

[鹿屋中央店] 鹿屋市笠之原町2038-1 [志布志店] 志布志市志布志町安楽2027-1
TEL (0994) 43-4193 TEL (099) 472-4590

菓子工房 ボンヴィヴオン

〒893-0064 鹿屋市西原4-14-29 TEL (0994) 40-0011



債務整理、離婚、遺産分割、交通事故、一般法律相談

相談予約 お気軽にご相談下さい。

(平日) 午前9時～午後5時30分

身近なホームロイヤー

法律扶助制度を利用した無料
相談実施しております。

早川法律事務所

弁護士 早川 雅子
鹿児島県弁護士会所属

TEL 0994-45-6000 FAX 0994-45-6001

鹿児島県鹿屋市打馬 2-2-27

URL <http://www.hayakawahouritsu.jp>



有限会社 カリヤ

・居宅介護支援事業所
(・YS マリ化粧品)

〒893-0132 鹿屋市下高隈町 5039 番地 31

TEL(0994)36-8800 FAX(0994)42-0895

グループホーム 愛 • 共用型通所介護 のどか

〒893-0132 鹿屋市下高隈町 5039 番地 8

TEL(0994)40-6100 FAX(0994)40-6111

デイサービスセンター 愛乃家 • 住宅型有料老人ホーム 愛

〒893-0132 鹿屋市下高隈町 5030 番地 2

TEL(0994)43-6666 FAX(0994)41-0086





株式会社

サクラクレパス
鹿児島工場

鹿屋市吾平町籠2834-1

TEL:0994-58-6066 FAX:0994-58-6721

ホテル
太平温泉

〒893-0062 鹿児島県鹿屋市新生町 5-25
TEL 0994-44-3300 / FAX 41-4411 URL <http://www.taihei-onsen.com/>

有限会社 大隅教育用品

〒893-0014 鹿児島県鹿屋市寿 8 丁目 12-18
電話 (0994) 42-3380 FAX (0994) 43-0246

株式会社総合印刷

〒893-0061 鹿児島県鹿屋市上谷町 4-6

TEL.0994-43-2093



有限会社 アクシス三味堂

〒893-0014 鹿児島県鹿屋市寿七丁目 5-30

電話 : 0994-44-3380 FAX : 0994-44-7966



有限会社 さつき

〒893-0013 鹿屋市札元 1-1-48

TEL 0994-44-4812

FAX 0994-36-4666

鹿屋市北田町 4 番 2 号



文精堂書店

電話 代表 ☎ 3300

株式会社 森電気

代表取締役 森 裕志

工事部 電気設備工事 空調設備工事 水道工事 消防設備工事 土木工事



エディオン 〒893-0023 鹿児島県鹿屋市笠之原町 5-65

モリ鹿屋東店 TEL(0994)42-3644 FAX(0994)43-9051



心豊かな
車社会を
願う



無料送迎バス
各方面運行中



託児施設あり



教習ローン
ご利用可

かのや寿自動車学校



普通免許



中型免許



大型特殊免許



けん引免許



普通二輪免許



大型二輪免許



普通二種免許

ご予約・お問い合わせは

TEL 0994-43-2627

E-mail info@kotobuki-ds.jp

〒893-0013 鹿児島県鹿屋市札元1-13-30 鹿児島県公安委員会指定教習所[技能試験免除]

ホームページURL <http://kotobuki-ds.jp>

70th

1953年、昭和28年に鹿児島初の民間放送局「ラジオ南日本」として開局したMBCはおかげさまで創立70周年を迎えました

これまで支えてくださった皆様に感謝しこれからも喜怒哀楽をともにしながらふるさとを元気にしていきます

鹿児島の情報盛りだくさん!

放送の
毎週水曜
夜8時

どんと 鹿児島

スマホやタブレット、パソコンで
♡お気に入り登録を!

QRコードから
すぐご覧いただけます♪

TVerで無料配信中!

最新話
毎週木曜
昼12時
配信開始 (原則)



MBCバーチャルタレント みなみ

ふるさとたっぷり
MBC南日本放送

紙だけじゃない!!!

お客様の魅力を最大限に発揮するためにさまざまな形の商品をご用意しています。

定番の広告だからこそ人が動く動機につながります



各種看板

会社イメージの宣伝カー。移動しながらの宣伝効果が狙えます



カーラッピング

記念品や商品アイテムとして人気の高い商品です



マグカップ

Tシャツ、パーカーなどにプリントして宣伝効果を発揮



ウェアプリント

イベントに対応したアイデアうちわ



既製品各種プリント

飾るだけで店舗イメージを演出 記念品にも



ノベルティーグッズ

既製品のバッグなどにプリントができます



店舗の活気と情報を発信できる定番アイテム



のぼり旗・タペストリー



タオルプリント

オリジナルファイルが作成できます



クリアファイルプリント

「動画広告も見せたい」「スマホと連動してもっとたくさん情報を伝えたい」というときに
AR (拡張現実) サービス
・ホームページ制作
・デジタルサイネージ



サンプルもご用意しております。お気軽にお越しください!!

ヒューマン印刷に徹する
株式会社 新生社印刷

鹿児島県鹿屋市礼元1-22-34
☎0994-43-2238

かのや未来創造プログラム－平和の花束 2022 －

令和5年発行

発行：平和の花束実行委員会

〒893-8501 鹿児島県鹿屋市共栄町20-1

TEL 0994-31-1137 FAX 0994-41-2935
